三戸町下玉ノ木平地区採集の「弓矢文土器」（資料紹介）

山　口　航　生（三戸町役場総務課）
野　田　尚　志（三戸町教育委員会）

1　はじめに

本稿は、三戸町大字豊川字下玉ノ木平地区にて採集した、弓矢の意匠を持つ絵画土器について紹介し、その詳細を報告するものである。なお、タイトルを「狩猟文土器」ではなく「弓矢文土器」とした理由は次のとおりである。

本資料の文様は、客観的に見て間違いなく「弓矢」と認められる線画である。しかし、「弓矢」が描かれた破片を偶然拾っただけで、器面全体の様子は不明であるなど、断片的情報から狩猟的行為を表す絵画と特定することは困難と考えられた。このことから、本稿は本資料における事実記載に留め、破片から読み取れる情報以上の推考は行わないこととする。

2　発見の経緯

2007年３月下旬に当地区を車で走行中、畑地の中にひときわ大きく削平された跡が目についた。この付近は、以前から縄文時代前・中・後期の遺物が表採できるところであったことから、念のため踏査した結果、多数の土器片や石器の散乱を確認した。表採を数日間行い、段ボール１箱半ほど持ち帰り洗浄したところ、中から見慣れない文様のある土器片に気づき、本資料の発見となった。

3　地理的環境

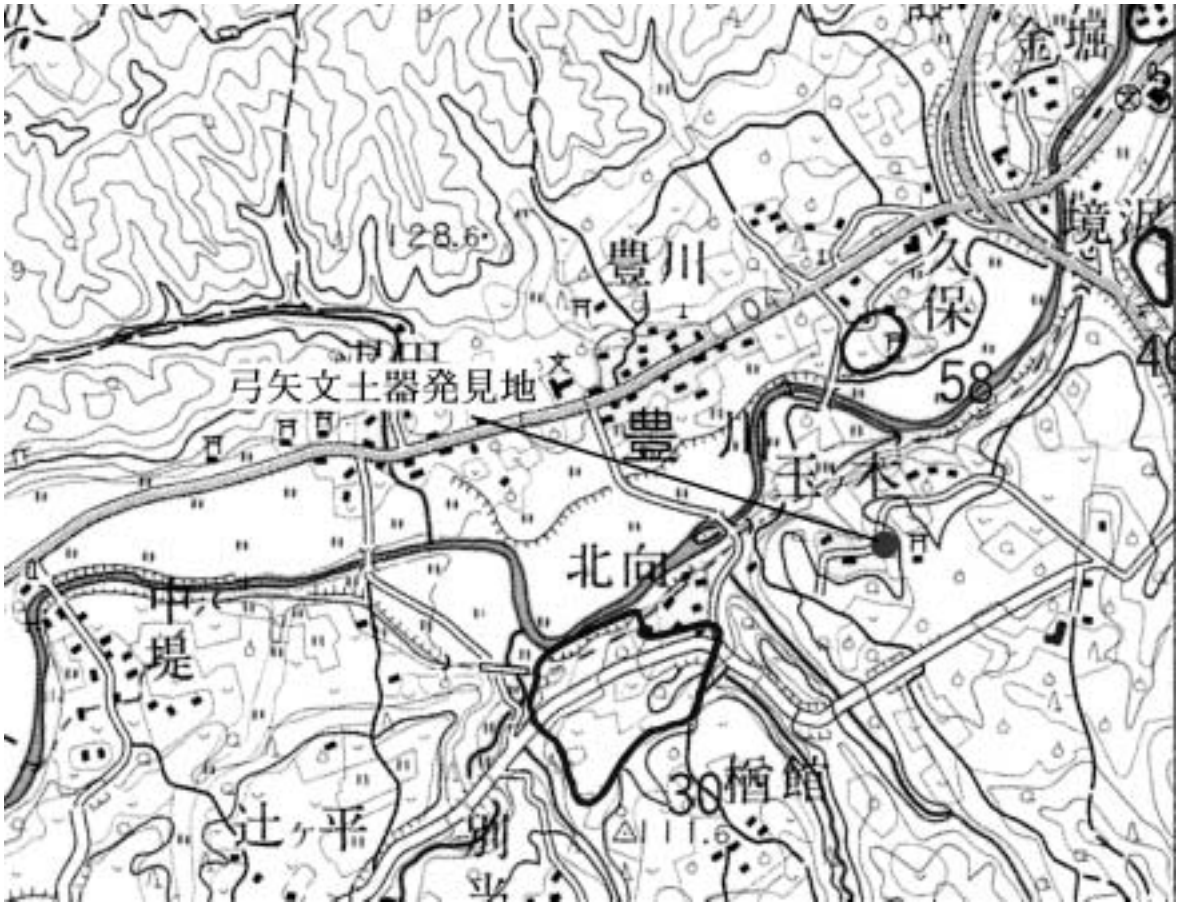
当地は三戸町の中心部から西南へ約4.5ｋｍに位置する。北側に300ｍほど離れたところに流れる熊原川により形成された段丘で、台地は北側に向かって傾斜している。本資料発見地の東側と西側には３～７ｍ以上を測る深い沢があり、東側の沢には現在も水の流れが確認される。標高は約100ｍで、周辺一帯は果樹園・畑地・水田などが広がる純農村地帯として営まれている。当地は地元の人々にも遺跡としての認識があったようで、耕作等で採集された縄文時代前期・中期を中心とした遺物が、民家や閉校した旧校舎に保管されていた。

4　発見時の状況

表採した地区は、傾斜地の高低を削平と盛土により平地造成されたところで、本資料は、当地の稜部中心から北東方向に傾斜する部分に盛土された表土より採取したものである。

付近に露頭する地層から、現地の基本層序は次のように大きく分層された。〔第Ⅰ層：表土〕、〔第Ⅱ層：数㎜～１㎝大の白色・黄色浮石を含む黒色土層〕、〔第Ⅲ層：中掫浮石層〕、〔第Ⅳ層：数㎜～１㎝大の黄色浮石を含む黒色土層〕、〔第Ⅴ層：南部浮石層〕。表採資料は本来第Ⅱ層に包含していたと考えられる。

本資料の他に表採された遺物の内訳は、円筒下層ｄ２式、円筒上層ｅ式、大木８ａ～10式の土器片が中心であるが、後期前葉の土器片も数点みられる。この他に時期不明の土製品が数点、石器については、石鏃、石匙、剥片、礫石器など十数点が表採された。



青森県三戸郡三戸町大字豊川字下玉ノ木平地内
東経：141度14分15.2秒、北緯：40度21分41.1秒

5　文様

本資料は深鉢形土器の口縁部破片である。推定される直径は約30㎝、厚さは１㎝ほどで、山形状突起をもつものと考えられる。口唇部から頸部はナデとミガキ調整による無文帯で、一条の横位沈線文によって区画されている。頸部～胴部にかけての文様は明確ではないが、沈線文と縦位回転のＲＬ縄文が施されている。そして弓矢文は磨消された部分に沈線で描かれている。

弓は土器の体位と平行し、弓部は弧状、弦部は直線状に描かれている。両端部は、欠損のため全体画は不明である。弓部の両肩部には突起状の線が描かれており、競技用弓に付属する照準器に似た様相であるが、これは装飾の類として考えられている。

矢は弓の中心に描かれ、引き絞る前か発射直後の様相である。矢の先端には沈線で正三角形が描かれているが、これは矢尻を表現したものと捉えられる。

弓矢文の右側にも沈線文が見られるが、途中が欠損しているため連続性があるものかは分からない。本資料はその特徴から大木10式土器に分類されると考えられ、この弓矢文は、土器の主体的文様に連なるように描かれたのかもしれない。

この他に、同一固体と思われる土器片も数点見つかっているが、当文様に接合するものとしては確認されなかった。

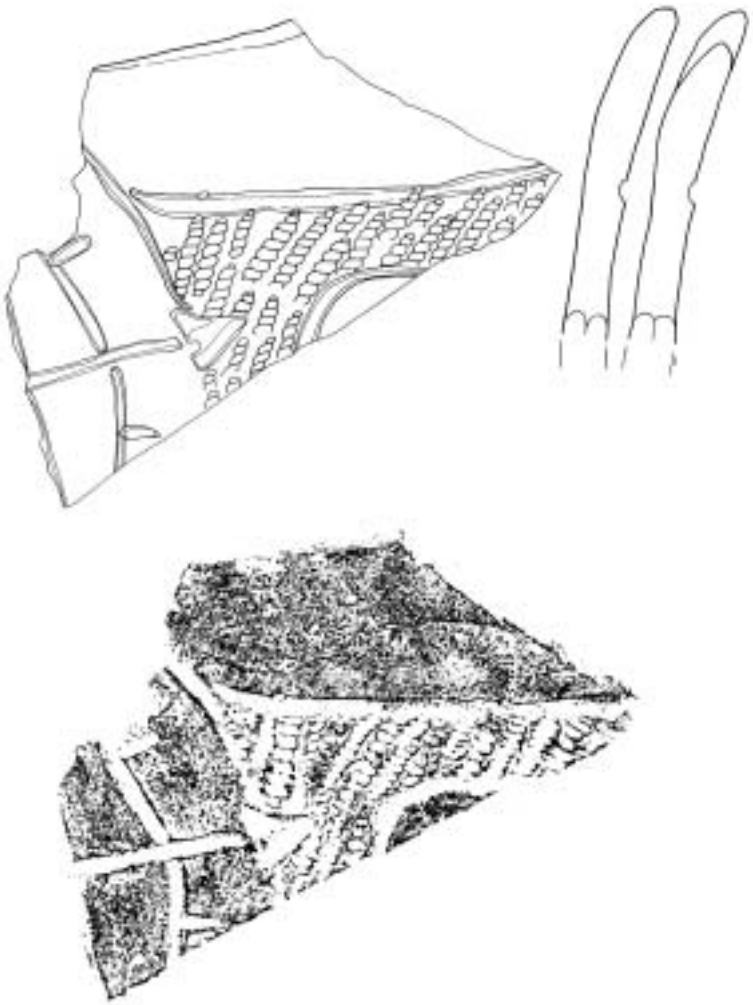
6　おわりに

縄文時代における絵画的意匠の見られる土器の中で、弓矢や樹木等の描写として認められる文様をもつものは「狩猟文土器」という分類で扱われる傾向にある。しかし、前述したとおり、本資料においては表現された文様が狩猟として捉えることができないため、視覚的に得られる確実な情報にもとづき、暫定的に「弓矢文土器」と名付けた。

縄文時代の各時期・地域毎に様々な文様が施される遺物中で、視覚的に理解可能な絵画資料は縄文文化を知る上で大変貴重な存在であることは言うまでもない。特に、当該資料に分類される「狩猟文土器」は明瞭な描写が見られ、意匠についても類似している個体があることから、文様意図の解明についての研究が深まってきている。しかし、弓矢は歴史上において敏捷な動物を狩る猟具や戦闘時における兵器の他、祭礼や儀式の用具としても使われてきた。これらのことから、本資料については「弓矢」＝「狩猟」とは特定せず、再考の余地を持たせることとし、今後は、類する他の絵画や器種と比較を重ね、「用途」についても迫れるよう調査追究していきたいと考える。

今も、この弓矢文土器に接合する破片を探すため、足繁く現地へ通い続け表採を試みているが、残念ながら未だに他の部片は見つかっていない。しかしながら、造成作業の合い間に本資料を採集できたことは極めて幸運であったことと考えたい。

最後になりましたが、本資料に関してご教示くださいました葛西勵先生に深くお礼申し上げます。



弓矢文土器観察
　器種－深鉢形土器
　文様－口縁：無文、胴部：沈線文、ＲＬ縄文（縦位回転）、無文（磨消）、弓矢が沈線で描かれている
　備考－外面に微量の炭化物が付着、胎土に１㎜以下の雲母を多量に含む。